大正終わりの多喜二

倉田　稔

目　次

はじめに
1　島田の怪我
2　家庭教師
3　手島の思い出
4　高崎　徹
5　武田暹の思い出
6　武田の多喜二文学論
7　大山講演会
8　遊廓
9　伊藤整の小林多喜二文学環境論
10　瀧子（補）
11　瀧子の家出

はじめに

これは，小林多喜二伝の15である。

1　島田の怪我

大正13年（1924年）12月27日に，小樽・手宮で火薬の大爆発が起きた。信管の事故だった。五丁（＝5百メートル）離れていたが，嶋田正策の勤めていた事務所が壊れた。嶋田は2階で仕事をしていたが，その2階が落ち

て，つぶれた。彼は意識を無くした。意識を回復して，みて見ると，血が流れていた。ガラスの破片が横顔に刺さり，釘が頭を刺していた。爆発の勢いは大きく，レールが飛んだし，音が札幌まで聞こえた。嶋田は20日間，小樽病院に入院した。多喜二はすぐ見舞いに来てくれた(1)。

2　家庭教師

上山（現姓）初子さんとその妹は，当時，小林多喜二の家の近くに住んでおり，2人は多喜二に勉強を教わった。いわば家庭教師をしてもらった。彼女は語る。

多喜二の家は，小さい二間くらいの家であった(2)。朝，お餅をついて，売る。また三星パン(3)からパンを卸し，それを売った。質素な家だった。ごく貧しい家だった。三星に，お世話になっていたのでしょう。パン，饅頭，お菓子だけなら，しれている。あんな大きな立派な墓を立てられる家ではない。そのお金がある家ではない(4)。

昔は，貧しいものは貧しい，豊かな者は豊かであった。隣の家の真似はできない。いいところと悪い所の差がすごかった。多喜二が「不在地主」などのような小説を書くのは，当然だ。彼は純粋な人だったんだろう。

多喜二の母は，秋田弁が強かった。素朴な感じで，頭（＝精神）にスジがあった。毎日，上山さんの家に遊びに来た。からだが細く，小さいが，シン

（1）嶋田正策さんとのインタビューから。嶋田さんは言う，多喜二が庁商時代に骨折して入院した（既述）が，その時，見舞いに行かなかった。
しかし小生が思うに，嶋田さんが多喜二の入院に気が付かなかったか，当時は見舞うほど2人が親しくなかったのであろう。
（2）家については，拙稿「小林多喜二伝 ── 多喜二と小樽 ── 小樽移住から小学校卒業まで」（『人文研究』86輯）36ページ，「小樽高商入学の小林多喜二」（『商学討究』45の3）47ページ。
（3）伯父の店。
（4）多喜二の原稿料＝印税で作った。

が強かった。人をうらやむわけでない，あきらめたような人生であった。

ある時，インチキ医者がきた。耳の悪いのを直すという。三吾（多喜二の弟）の耳から，大豆のうるかしたものを，出して，これが入っていたから，悪かったと，言った。母は，これを見破った。「三吾は，生まれてから，耳に入ったものは，そんなものぐらいではない，もっと色々入った」，と母は応じた。インチキ医者は逃げた。

父は，大きな人だったが，病身だった。人と余り話をしなかった。

多喜二は，高商時代，長い黒いマントを着て学校へいった。家では，着物が好きで，大概，かすりを来ていた。銀行に就職してから，急におしゃれになった。紳士になった。体がキチっとなった。彼は，銀行員にふさわしい，やさ男であった。どこにあんな迫力があり，どこにあんなファイトがあるか，わからない。彼は，覚めた感じで人を見ていた。荒々しいことは言わない。悪いことと良いことを呑み込んでいる感じの，大人だった。上山さんの親類に重役などがいるが，そういう人に対してムキになったりしない。そういう人を憎むのでなく，そういう体制を憎んだ。人を憎まないで，機構を憎んだのだろう。

胸を張った学生ではなく，何となく隅の方で，ひょうひょうとしている感じであった。色白だった。多喜二映画の主演をした山本圭の感じであった。あんないい男ではないけれど。多喜二は，ものは言わない，いらないことは言わない。多喜二は，物静かで，礼儀正しく，やさしい人だった。やはり体が細く，小さい。端正な顔立ちで，品がよい。普通の人と話をする人ではない。ただし聞かれたことは答えた。

上山さんは，庁立小樽高女に通っていた。多喜二は，彼女たちに宿題をだして，鉛筆で何か書いていた。数学と英語を教わった。多喜二が，「今日はおわり」と書いて，終った。もう少し英語の字をきれいに書くように，言われた。彼女は，英語は，小樽高商出の小川成美先生に教わっていた。高女では購買部にパンが売られていて，買ったこともある。（彼女が多喜二に教わったのは，高女２年生くらいの時らしい。）

多喜二は，上山さんの家の一部を借りて勉強していた[5]。彼女は，多喜二の家に勉強をしにいった。多喜二は，友達の多い人で，しょっちゅう友達がきたり，彼が行ったりで，上山さんが多喜二を訪れても，今日はいないの，ということが多かった。月に2度くらい勉強を見て貰っていた。しかし，2カ月くらい，いないので，教われなかったこともあった。それで，自然にやめてしまった。

多喜二の母は，水にひたした　たくわんを薄く切って，砂糖を少し入れたものを，上山さんの家に貰いに来た。多喜二がその残った汁を好きで飲んでいた，と母は語った。母は，彼のことをアンニャ（兄，ということ）と言う。

弟・三吾は，毎日バイオリンの練習をした。父と三吾は，餅つきをしなかった。多喜二は，三吾には，薪も割らせない。三吾が手が固くなるから，というわけだった。弟には何もさせなかった。彼が弟のバイオリンを仕上げようと思っているのが分かった。三吾は，中川則夫の本当に大事な弟子だった。

妹・ツギは，上山さんの父の会社の事務員をしていた。姉・チマさんは綺麗な人で，地主でお金持ちの佐藤さんと，結婚した。別に結婚の披露はなかった。

多喜二の部屋に赤いカーテンが下がっていた。電気をつけると，夜，外に赤く出た。昔は赤い色は珍しい，特に男性ではそうだ。

瀧さんは，おとなしい，何かの陰をもったような人で，「おそば屋さんの女中」だったと理解していた。上山さんの母が，セキさんに，「お嫁さん？」と聞くと，セキは，「いいえ，嫁でないんですよ。お嫁さんだったらいいですが。」と答えた。上山さんは，だらしがない兄さんだと，思った[6]。瀧は，

（5）瀧子が小林家にきて，自宅の2階を作り，多喜二はそこを勉強部屋としたとされるので，それ以前のことかもしれない。
（6）結婚もしていない女性を家にいれるなんて，という意味であろう。

2階にいた。顔を満足にあげない。彼女は，いつでも手拭いを下げて，多喜二と2人で，海へ泳ぎにいった。多分，多喜二だけが泳いで，瀧は泳がなかったのかもしれない。

多喜二に，映画「ベン・ハー」を見に連れていって貰った。多喜二は，賛美歌「山路こえて」を歌った。丸い，いい声だった。だから，彼は教会へ行ったことがあるのではないか。

戦前に，小林家を訪れたら，特高に引っ張られると思って，行けなかった。

多喜二の骨が戻ってきたとき，駅に特高が沢山きて，人を寄せなかった。上山さんは，多喜二から，彼のかいた水彩画を2枚もらった。生物の花と，石狩の絵で，マストが曲がっていたものだった。その絵に額縁をつけようとして，買いに行った。そこに多喜二の筆になると記していたら，その後，特高が家に入った。彼らは，それはお金をだして買ったのか，もらったのか，と恐ろしい追求であった。どうして多喜二に部屋を貸したのか，多喜二が1人でそこへ居たのか，友達がきたかと，これまた凄い追求であった。上山さんの父は，引っ張られるかと，心配した。当時，多喜二や共産党については，語れなかった。この絵の話も初めて，ここで，した。共産党は恐ろしいものと思っていた。犯罪者どころではない。殺されるわけだから(7)。

3　手島の思い出

多喜二が卒業すると同時に，小樽高商に手嶋恒二郎が入学した。手嶋は学生時代に，多喜二家を訪れた。「あの頃，私はまだ一介の学生であったが，小林氏の方はもう卒業していて，北海道拓殖銀行のれっきとした行員だった。」(8) 手嶋は，多喜二に会いに行ったのだが，結局会えなかった。その日

---

(7) 松崎彰男先生が上山初子さんにインタビューした録音テープより。加川勝人先生からコピーを戴いた。会話の順序は入れ換えた。

(8) 久城寿右衛門編著『ある情熱の記録　手嶋恒二郎伝』株式会社保険研究所 1981年（以下，『手嶋恒二郎伝』と略す），78ページ。

は，北の国の小樽といっても，なんとも暑い日で，多喜二の家の入り口の戸を開けて，その狭い部屋に足を踏み入れた途端に，熱気がムッときた。彼の部屋には，1枚の絵もなければ，1輪ざしも置いてなかった。部屋の広さは，6畳ぐらいで，色のあせた畳敷き，部屋の片隅に，ちょっとした木製の物入れ，小さなちゃぶ台，キチンと整理された和机，それが全部だった。あとはすべて書類の山だった。部屋の片隅に，本当にキチンとたたみ上げられた寝具があった。

壁一面に留金でとめられていた北海道全域の大きな地図，その地図の上には，至るところにメモ書きが貼りつけられてあった。机の上には，どしっと積まれた原稿用紙の中に，会計帳簿のはしを切り取ったようなものが数葉あり，その1枚1枚には，極々細かい字がびっしりと書き込まれていた(9)。

手嶋は，下宿の食事が終わると，よく薄暮れの小樽の町を散歩した。小林家の前にさしかかると，きまって美しい提琴（＝ヴァイオリン）の旋律を耳にした。見事な音にはほとほと魅せられ，時には，随分と沢山の人々が立ち並んで聞いていた。提琴のひき手は，小林家の末男であった(10)。

4　高崎　徹

高崎徹は，東京外語学校を卒業し，大正14年（1925年）4月に，小樽新聞社員となって小樽に来た。同時に小樽高商のロシア語講師にもなった。彼は書く。

「その年の十月頃のある日に，始めて小林多喜二に出会った。当時私（＝高崎）は富岡町二丁目で小樽駅のすぐ線路脇の土手の上にある家に住んでいた。たしか日曜日だった。」「玄関に訪う人の声がするので，降りて行くと，黒の背広に黒いボヘミアン・ネクタイをした豊かな長髪の蒔田栄一君が微笑

(9) 同，79－80ページ。ただし引用のさいに，省略を多用した。以下，同様。
(10) 同，81ページ。

して立っている。そして，その脇には紺がすりの和服に袴姿の学生のような青年がいる。早速二階へ案内して炉辺に」座った。蒔田も東京外語学校の出身で，高崎と見知っていたし，高商の英語講師をしていた。蒔田は言った。「今日は小林多喜二君を紹介し，ぼくらのやっている〈クラルテ〉にきみも入ってもらおうと思って，二人でやってきた。」小林は懐中から一冊の〈クラルテ〉を取り出し，「小林多喜二です」ペコンとお辞儀して「見て下さい」と言いながら雑誌を私に手渡した。その挙動がいかにも都会人らしくない朴とつ訥さなので，第一印象から全く好感が持て，少しのてらいもない誠実な人間だなと感じた。この時まで，多喜二らは，『クラルテ』を第4輯まで発行していた。多喜二は，だから第一輯から4輯までの何か1冊を出したのであろう。高崎が『クラルテ』に入ったかどうかは分からない。第5輯巻末には例外的に同人名が記されていないからである。第5輯にある山後信が高崎でないとすれば，高崎は，第5輯に執筆しなかった。

高崎は書く。「この時まで私はまだ小林多喜二を知らなかった。」「さて，私たち三人の話題は，世間話や社会問題，政治問題などは一切なく，ただ文学に関することばかりであった。まさに三人とも単なる文学青年であったようだ。多喜二に，「日本の作家では誰が好きか」ときくと，「志賀直哉です。作品を送って見てもらっています」とのことであった。まだプロレタリア文学に走ってはいないが，しかし彼の話の節々には，当時の日本文壇の作家と作品とには不満を持っていることが，はっきり窺えた。第一，同人雑誌に《クラルテ》と命名したことからしても，すでにバルビュスを愛好していることが知れた。

外国作家について大体私［＝高崎］と共鳴した作家は，フランスではフィリプ(11)，モーパッサン，ゾラ，ユーゴー，スタンダール，ロマン・ロランなどであった。私［＝高崎］は，専門のロシア文学以外には，その頃特にス

(11) Charles Louis Philippe, 1874-1909.フランスの小説家。ポピュリスト＝民衆作家。作品に，『母と子』1900，『ビュビュ・ド・モンパルナス』1901などあり。

カンジナビアのものに興味を持っていたので，クヌート・ハムスン[12]やストリンドベリ，イプセンなどを語り出すと，やはり彼も読んでいて，「好きだなあ！」と，共鳴してくれた。ロシアの作家では，やはりトルストイとゴーリキーとを，彼は最も敬愛していた。話がはずんで，以上の諸作家の作品について，その思想性に関してはあまり論ぜず，むしろ主人公の性格とか，場面，雰囲気の描写とか，そういったことについて，いかにも文学青年的に熱っぽく語り合ったものだった。例えば，ゴーリキーの初期のもの，《チェルカシ》とか，ストリンドベリの〈赤い部屋〉とか，ハムスンの〈飢え〉とか等々，であった。

要するに，その時の多喜二は，ロマンチックなところが多分にある理想主義者で，しかもまたエネルギッシュな熱っぽいものを持っているという印象を，私［＝高崎］はうけた。会談は約三時間ぐらいも続いた。初対面としては大変長いが，そこらのところも，呑気な文学青年同志の場合は，めずらしいことではない。じっさい，この日は，私にとっては愉快な有意義な日であった。」「二人を送って富岡町の通りを行くと，夕陽がすでに日光院の後の山蔭に去っていて，そこの山も，市立高女の裏山も，一面に唐錦のような紅葉であ」った[13]。

5　武田暹の思い出

武田暹（後の中津川俊六）は書く。

「小林との交遊は，彼が高商を出て拓銀に入ってからの十年ほどであるが，その間，小林は思想的にも文学的にもぐんぐんとじつにすばらしい成長と発展とがあって，私との距離はみるみるうちに遠くなってしまったけれど，と

(12) Knut Hamsun, 1859-1952. ノルウェーの小説家。代表作『飢』1888，『土の恵み』1917で，ノーベル文学賞。
(13) 高崎　徹「多喜二と会った日」（『緑丘』42），27ページ。引用文中に，時に読点を入れた。

いって友人としての交遊にちっともひびがはいらなかったのは，不思議である。」

「小林は風呂なぞは時間が惜しいといって，三月くらい入らなくても平気だったが，油気が人より少ないせいか，その割合いに皮膚が汚れていない。しかし，たまに銭湯にいくと，風呂代を倍額おいて，二人分ゆつくり入るよと，番台にことわって，事実，まことにのんびりと時間をかけて洗い出すので，一緒に入っている私は，あまりにも長いので手持無沙汰になってしまう。小林という男は，何んでもとことんまで追求する。頭とからだで納得するまでは止めない。風呂にしても，入らなければ三月も入らないで平気だが，入ったとなると風呂に入る目的を十分に完全に果たすのである。小林を裸にすると面白い。丈は五尺そこそこで，肌はなめらかに白く，手足もきゃしゃで，大人らしい骨格を持っていない。顔，頭は大人だが，からだつきはまるで十二，三の子供だ。最初に銭湯にいった時なぞは，私は大きい方なので，こんな少年を友人にしている自分が阿呆らしく，くすぐったくてしようがなかった。

とことんまで追求して止まない小林のこの性分は，天下一品である。彼は銀行を退けるとまつすぐに家に帰る日は，一年を通して数えるほどしかない。したがって夕食は町でたべる。たべものの話だが，たとえば，どこそこのトンカツがうまいとなると，その店ばかりに続けて何回でも通うのである。毎日，そのトンカツのお相伴にされるこちらがまいってしまう。さてその店を卒業（彼はよくこの卒業という言葉を使う）すると，別のトンカツ屋へまえと同じように通うのだ。そしてこの二つの店のトンカツを比較研究して，そのうまさ，まずさをきめるわけである。味覚もここまでくると味気ないが，小林はこれで十分たんのうしている。」(14)（テンを補った。）

(14) 武田「大きな子供」（『緑丘』42），26ページ。

6　武田の多喜二文学論

高商を卒業したころの多喜二の文学について，同じ『クラルテ』同人となった武田暹は書く。(テンを補った。)

小林の諸作品は，「『クラルテ』をはじめてからの作品を通してみても，やはり自然主義を基調としたものであった。これは私［＝武田］だけの見方ではなかった，というのは，同人仲間で小説の研究会や合評会をさかんにやったが，小林の作品は，いつもみんなから，自然主義的に古い，という批評を受けた。小林はそれを非常に気にしながら，これでもか，これでもかと，つぎつぎに小説を書いた。

そのころの日本の文学は，自然主義がほとんど主流的な力をよわめていて，それに代わるものとして，白樺派の人道主義文学があったし，つづいて芥川龍之介，佐藤春夫を先頭とする新ロマンティシズムが勢いを得ていたのである。しかし，小林はどういうわけか，この自然主義以後の新しい文学運動には無感動にちかい姿勢をとっていた。意固地なまでにこの日本の新小説にふれまいとする気構えさえ見えた。小林には新をもとめてそれにおぼれるような軽はずみなところがみじんもなかった。

小林の小説勉強の対象は，ほとんど外国文学に限られていたのであった。それも……ゲーテならゲーテを，１年も２年もかゝつて，それにばかり食い下がっていた。彼は卒業という言葉をよくつかったが，ゲーテをやっとのことで卒業すると，こんどはトルストイを１年生から勉強して卒業するまでそれをつづけた。しかし，彼にとって卒業ということは，単にその作家のものを全部讀了するばかりを意味しなかった。大事なことは卒業論文を書くことで，自分のゲーテ観，トルストイ観を組み立てるにあった。専門の外国文学研究者ならともかく，自分の小説に血肉をあたえるために，彼はこうして丹念に，ほとんど徒労にひとしいかとおもわれる努力をつづけながら，外国の古典としてゆるぎない大文学にたちむかったのであった。

小林の文学の土壌は，明治の自然主義であったが，それを育て，発展させ

たものは，……外国文学で，そのために，ついに大正期の新文学の影響をこうむることがなかった。これはおそらく小林だけにかぎられた特殊な文学巡礼でもあった。しかし，かれのこの文学巡礼の道しるべはつねにリアリズムにあるのであって，だから大正期の新文学の中にそのリアリズムを発見できなかったといった方が，小林のためにも妥当な見方であろう……。たゞ，異例として，志賀直哉があげられるけれど，これとても自然主義のただしい後継者としてのただ一人の作家である志賀直哉であってみれば，小林がいかにリアリズムの追求にその文学的けっぺきを持していたかという証左となるだけで，けつして異例だとはいえない。」

「小林のリアリズムは，小林にとっては，かけがえのない絶対唯一のものであった……。彼の作品活動をみていると，それがじつにはっきりと判るのであった。」（テンを補った。）

「小林のリアリズムは，しかし，小林自体にふかく喰いいるばかりで，ついに横へのひろがりを持つことができなかった。だから彼は，いわゆる私小説の作家として完璧にちかいところへまで肉薄していたけれど，この私小説作家が「蟹工船」から「党生活者」にいたるまでの幾つかのプロレタリア作品を書きつづけたのであった。破綻は当然だった。長編に欠けてはならぬ立体観と構成力が，いずれの作品にも希薄であったばかりでなく，大事なことは，小林のリアリズムが，そのいずれの作品においても，作家とおもわれる主人公を描くに成功しているだけで，数多い登場人物に彼のリアリズムの手がついに及ばなかったことであった。」(15)

これらの指摘はほとんど正しいし，非常によく多喜二文学を見ている。だが，「破綻」という一点だけは，疑問である。また多喜二を私小説作家として見ているのも，部分的には間違いである。

---

(15) 武田「回想の小林多喜二」（『小林多喜二研究』），214－217　ページ。

7　大山講演会

手嶋は書く。

そういうさ中（＝軍教事件，別稿で扱う）のことであった。東京から早稲田大学の大山郁夫[16]が，マルクス『資本論』の研究者として名をなしていた櫛田民蔵[17]と連れだって来道した。

さて，大山郁夫（1880－1955）は，早稲田大学を卒業後，欧米に留学し，帰国して早大の教授になった。彼は，学生の軍事教練に反対した。1915年に辞職して，大阪朝日新聞社の記者になった。だがシベリア出兵に反対して退社した。1918年，吉野作造（1877－1933）らと黎明会を組織した。1919年，長谷川如是閑（1875－1969）らと雑誌『我等』を刊行した。1923年，早大の軍事化に反対した。

もう一人の，櫛田民蔵（くしだ　たみぞう，1885－1934）は，京大卒業後，大阪朝日の論説記者になった。同志社大学教授を経て，東大経済学部講師，そして『我等』の編集にに加わった。1920年，森戸事件をきっかけに辞職し，大原社会問題研究所員になった。ドイツへ留学し，帰国後，マルクス経済学に向い，有力な理論家になっていた。

手嶋は続ける。

小樽（高商）の大講堂でも，この2人の，長時間にわたる公開講義が催された。［大山の］講義内容は，政治と社会と大衆とを結びつけた［,］学問的講演というよりは，政治的啓蒙演説という調子であった[18]。それでも，あの真面目な学者であった大山の講演は，先生独得の若干どもりがちの，しかし頗る情熱のこもったものであったから，聴衆の多くに多大の感銘を与え

---

(16) その後，大山は，1929年，労働農民党中央委員長になり，1930年に衆議院議員に当選したが，弾圧のために，1923年にアメリカに亡命した。戦後，帰国した。『全集』5巻あり。
(17)『櫛田民蔵全集』5巻あり。
(18)『手嶋恒二郎伝』82ページ。

た。

櫛田の講義も同様で，「私は『資本論』をいままでに五十四回も読みかえしました」，という言い出しに始まった，いかにも淡々とした話ぶりは，『資本論』の研究等が多くの人々の間で熱心に進められていた折りであっただけに，大山以上の深い印象と収穫を与えたようだった。

それにしても，全く新しい体制を目指す二人の学者を小樽の学校に誰の企画で呼ぶことにしたのか。ただそういう突飛な企画の実現が可能であったという状況が，あの学校にあったことは確かな事実である(19)。

2人はその後，札幌を振り出しに，道内各所の巡回講演に出かけた。

8 遊廓

多喜二は，遊廓に遊びに行ったことがある。これは伝説なのだが，多喜二はしかし女性を抱いたのではないとされる。実際はそういうことはない。当時の日本男性は，女を抱いたのである。多喜二が女郎屋で女性と寝なかった，話だけして帰ったという話は，多喜二本人が振りまいたのか，母が多喜二から聞いて振りまいたのか，分からないが，近所でもそう思われていた。例えば，幸さんの友人・二木初子（新姓）さんも，そう聞いている。多喜二は，女郎屋へ行った主人公が女性と寝ないで，話だけをしてかえってくるという小説を書いた。そういうことで伝説になったのだろう。ただし，友人がしじゅう遊廓へ行くのに，彼はなかなか行かなかった。それにまた，多喜二は，遊廓に行くようになるまでは，友人たちが女性を人間として見ていないことに反発をしていた。1926年8月の日記では，友人・斉藤を批判している。斉藤は，女を，つまり淫売婦をふみにじってやる，と言う。多喜二は，それは淋しいことだと，慨嘆する。「性的要求は俺だっても感ずる。が，そのハケ口を考えれば，その道徳観念から，出来るだろうか。」「何んと云っ

(19) 同，83ページ。

たって駄目だ。」「俺は俺の道を行こう。とう〳〵俺は独りになってしまった」[20] と書く。多喜二はこの点で，正義感が非常に強かったことが分かる。しかし1926年10月に，とうとう多喜二も遊廓に足を運んでしまった。批判していたたった2カ月後である。当時の男性は，病身でなければ，ほとんど女を買ったものである。

多喜二が遊廓へ行った話の一つは，一緒だった嶋田正策さんから，小生は聞いている。プッと吹き出すような話である。だが，「誰にも言わないで下さいよ」，と言われたので，ここでは紹介を差し控える。多喜二は何回か遊廓に行っている。日記にもそれを隠語で記している。しかし何回か行ったうちの1回か2回は，女性と寝なかったこともありうる。実際は，遊廓へ行って女性と寝たとみて差し支えない。寝なかったというのは，伝説にすぎないし，不自然である。

多喜二が遊廓に初めて行ったのは，恋人・田口瀧子が自分の家にいる時である。瀧子はそれを知ったに相違ない。もしかしたら，すぐ後に彼女が行動する瀧子の家出は，多喜二の遊廓行きに関係しているかもしれないのである。

9　伊藤整の小林多喜二文学環境論

作家・伊藤整は，いくつかのところで，北海道と小樽とその時代とを関連づけて，小林多喜二を論じている。それを紹介しよう。

「北海道人の生活意識は，ナイチ（内地）[21] の人達のそれよりも，大マカで，形式にこだわらない。」北海道は，「自然の力の人間生活に対する圧力がかなり大きい。」「北海道では，自然に抵抗する文化の伝統が浅く，新しく，かつ臨時的，植民地的であるから，『この土地では人間の生活はいつ自然に負けるか分からない』という不安定感がある。」

---

(20)『小林多喜二全集』第7巻，新日本出版社　41ページ。
(21) 北海道では，おかしいことに，北海道以外の日本を，内地という。

伊藤は，その意識の悪い面をのべてから，言う。「しかし，同じ意識が良い形でも働く。新式の機械，新しい農耕法などを使うことをタメラワズにすること。義理や人情や代々のシキタリを，軽く見，さして恐れないこと。実力のある人間がドシドシ仕事をするのをネタンだり，ソネンだりすることが少ない等である。

そして当然芸術の面では，美意識の伝統を無視して」しまう(22)。「新しい思想や新しい理論を尊重する現れとなる。文学方面では，小林多喜二，島木健作，本庄陸男，亀井勝一郎というような，マルクス主義の作家または，これを通過した文士を生み出している。だから，反面では文章が美しいとは言われない。

そしてこの四，五人の文士たちには，日本の俳句や短歌や能やカブキの世界にあるような伝統の美意識がない。」(23)

ついで，伊藤は，当時の小樽の文学状況を語る。

「大正十年ころから昭和初年にかけての小樽と札幌には，いろいろな文学上の芽ばえがあり，小林多喜二の加わっていた『クラルテ』とか，『北方文芸』のほかに，私が友人と出した『青空』とか『信天翁』という雑誌もあり，文学上の先輩も多かった。古い人では，小田観蛍，遠藤勝一，歌人として大熊信行，並木凡平，山下秀之助，その他多くの人がいた。まだものは書かなかったが，当時札幌に，島木健作もいたのであり，また後には書くことをやめたが，武田暹とか平沢哲夫なども，才能のある人々であった。」(24)（テンを補う。）

『クラルテ』は，事実上，小林多喜二が主宰し，『北方文芸』は，那珂　捷（小樽高商，昭和2年卒）らが出した(25)。平沢哲夫は高島の人である。

---

(22)『伊藤整全集』第23巻，新潮社　昭和51年，329ページ。
(23) 同，330ページ
(24) 同，24巻　昭和51年，307ページ。
(25) 那珂「小樽夜景」（『緑丘』62号）。

伊藤は書く。「高田紅果……が，『群像』……によく作品を発表していた。また山下秀之助氏が小樽病院に医師として赴任したのも，それに続いた頃であり，……私が20才の……時には，山下さんを中心にして歌よみのグループが作られていた。……片岡亮一……蒔田栄一……その他，山内，吉岡というような人々が入って，多分『新樹』という雑誌を出したのは，このグループの仕事であったと思う(26)。

またこの土地の『小樽新聞』というのがあって，そこには口語歌人の並木凡平という人がいた。小樽中学には小田観蛍さんがいて，」(27) 小田は小樽で最も有名な歌人になる。

「大正一三年ころに，山下秀之助氏が小樽病院へ赴任してきた機会に，……片岡と……山内実君などが，山下さんと一緒に歌を作っていた。」(28)

「……また武田暹さんが，小樽中学で私より1年上級にいて，この人は中学生なのに，ふしぎに老熟した小説を書いていた。そのころ武田君たちの出していた『群像』という雑誌は，田舎で見ることのできない立派なものであった。」(29)

「その『群像』には，明治11年頃に小樽に啄木がいた時にその弟子になった高田紅果さんが，歌を発表したりしていた。……この雑誌によって，小樽の文学史の石川啄木以来の一脈のつながりが，高田紅果をとおして，武田暹や私などにまでつながる可能性があった。」(30)

「また小樽高商には，やっぱり啄木系で短歌の革新運動を行った『まるめろ』の主宰者大熊信行氏が，若い教授として来ていて……」(31) と書くが，ただし，大熊が『まるめろ』を出したのは，後年のことであり，また大熊は小

(26)『新樹』は，片岡や佐々木妙二らが創刊した短歌の同人誌であった。
(27)『伊藤整全集』24巻　昭和51年，410ページ。(時にテンを補う。)
(28) 同，440ページ。
(29) 同，439ページ。
(30) 同，439－440ページ。
(31) 同，440ページ。

樽時代は文学をやっていない。

「地方文壇的動きではあったが，天才的なところのあった並木凡平という口語歌人が，『小樽新聞』を舞台として，日本の他の地方では見られない幅の広さで口語歌運動を展開していたのである。」(32)

伊藤整を文学に導きいれたのは，先輩の北見恂吉＝鈴木重道である(33)。

「田居尚（川崎尚）とその従弟の川崎昇も，歌を作っていた。この二人が中心になって，『青空』という雑誌を出していた。……高商生だった私（＝伊藤）がその雑誌に引き入れられ，川崎昇と二人で……高商石鹸を売って雑誌の資金を作った。

……私が小樽市立中学に勤めていた頃，私と川崎昇とは，当時の小樽の電気会社の支社長をしていた河原直孝氏の息子の河原直一郎という詩を書く同年の友を得た。のちに河原直孝氏は小樽の市長になった。この河原君に金を出してもらって小樽で私たちの作った詩の雑誌に，『信夫翁』……」(34) がある。

「だからその時小樽で出ていた雑誌は，ここに挙げたものだけでも，『群像』『青空』『新樹』『クラルテ』『信夫翁』などがあるのだから，人口十二，三万の地方都市としては，文芸が盛んであった……」(35)

「遠藤勝一が，たくぼく系の歌風に抒情味を加えた歌を作っていて，新潮社から歌集を一冊出しています。」(36)『林檎の花』である。

札幌にはその頃，『路傍人』（？）という立派な歌の雑誌がありました(37)。

「小樽という商業都市は，その頃，奇妙に芸術的な動きの盛んなところだっ

---

(32) 同，440ページ。
(33) 同，23巻　昭和51年。
(34) 同，24巻　440ページ。
(35) 同，440ページ。
(36) 同，23巻　昭和51年。
(37) 同。

た。」[38] 伊藤が「交際していた小樽の文学青年には，歌よみが多かった。大正末年頃は，小樽，札幌地方は，異常なほど歌の盛んなところだった。」[39]

「そういう文学的風土のなかから小林多喜二が出て，小説家になったのである。彼をただプロレタリア文学の作家として扱うことは，必ずしも彼の全体を語ることにならない。たまたま彼がそういう思想の線でその文学的才能を伸ばしたのだ，と私としては考えたいのである。」[40] この理解は，大きな目で見ると正しいものであろう。

一方，伊藤整は，自分の初めての詩集『雪明りの路』を出版する。それは，大正も終る直前であった。

10　瀧子（補）

田口瀧子について，実弟・宮野　駿が，少し述べているので[41]，紹介しておく。

タキが生まれたのは，明治41年5月9日，小樽区色内町48番地　泉（カネイズミ）蕎麦店，田口トモ方である。父親の玉蔵は，この店の住み込み蕎麦職人で，母親のキクノは，田口トモの腹違いの妹で，秋田から姉を頼って北海道へ渡ってきた。

泉蕎麦店は，部屋数の多いかなり大きな家だった。大正4年の地番改正で色内町2丁目6番地になった。

玉蔵は，大正2，3年ごろ，トモの力添えで，暖廉分けの格好で，高島市街の中心部，12番地に，初めて店を構える。当時，高島は小樽の隣村である。店は腰掛け程度の狭い店だった。のれんは泉で，蕎麦の味がよかった

(38) 同，24巻，439ページ。
(39) 同，410ページ。
(40) 同，307ページ。
(41) 宮野駿「哀しきルーツ探し」（『月刊おたる』1992年10月，平成4年10月号，通巻340号。）22－25ページ。

らしく，出前が多く結構いそがしかった。屋台を曳いた事実はない。

田口蕎麦店は，この後一時小樽へ移り，稲穂町の中央座の向いの方に店を張ったが，ほんの短期間で，再び高島村へ戻り，こんどは前の店とは道路一本挟んで向い側の十番地にやや大きな構えの店を出した。

タキは1年生の時から高島小学校へ通った。3年生ぐらいからは，学校から帰ると子守をさせられたり蕎麦の出前をやらされたりして，休む間もなく家業を手伝わされた。

高島暮し約十年，子ども7人を抱えながら，玉蔵，キクノ夫婦は，商売に失敗して，店をたたみ，大正11年の暮れ，親子9人が夜逃げをし，玉蔵の出身地，道南の森町へ遁走する。

しかし尾白内の実家もさして頼りにならず，森の駅前に蕎麦屋の看板を出したものの，急迫し，15歳のタキを室蘭の怪しいカフェーへ売った。

一家は再び小樽へ戻った。長橋町62番地に借家住まいをし，玉蔵は，慣れぬ日雇いをして細々と喰いつないでいた。

大正12年12月19日の小樽新聞朝刊の第4面に，「小樽の轢死者」という一段見出しで「十七日午後六時五十三分小樽築港南小樽間一五九哩二鎖（チェーン）付近に小樽末広町二一番地田口玉蔵が轢死しているのを同所を通過した貨物第一五三列車の乗務員が発見した」と報じた。

末広町は玉蔵の本籍。当日，ものすごい吹雪模様だった。

大正12年の暮れ，玉蔵に死なれたキクノは，この年から翌年にかけて，4人の子どもを次々と養子に出し，長男秀雄，三女ミツ，六女静枝の三人の子どもを伴って，稲穂町西3の27，日雇い労働者若月金次郎と再婚する。

四女のミ子（みね）は，この時小学校2年生で，竜宮神社下角にあった鳥料理専門店「千代本」，丹野ちよ方へ，五女シゲを稲穂町西5の3，港湾労務者奥野初次郎，八重夫妻方へ，七女シエ（スヱ）(42) は稲穂町西8の9，鍛

(42) ここで，三女，四女，五女，六女，七女と表現されているが，普通でいう次女，三女，四女，五女，六女であろう。そのままにしておく。

冶職佐藤半平，くに夫妻方へ，そして末子だった次男の宮野は，大正13年2月12日，稲穂町東2の19，洋品小間物店宮野要十郎，美代夫妻のもとへ，それぞれ貰われていった。

11　瀧子の家出

小林家に厄介になっていた多喜二の恋人・田口瀧子は，1926年（大正15年）11月11日に，家人の誰にも悟られないようにして多喜二の家を出た。多喜二にあてた一通の手紙を残した。

多喜二が東京へ出て勉強したいために，自分がいたら色々な点で多喜二をこまらし，まつわることになるだろう。家出をしても決して堕落の道はたどらない。多喜二を東京へ出すために自立してゆく，というものであった。

多喜二は書く。「俺が東京へ出て勉強したいために，自分がいたら，色々な点で俺を困らし，纏ることになるだろう，という考えである。

家出をしても決して堕落の道はたどらない，ということを書いてある。」「タキ子は俺を東京へ出すために，自立していゆく，という。」(43)

弟・宮野あて手紙では，瀧は書く。「私は小林にふさわしくない女だ。お別れしなければと思ったのです。そして決心して小林の家を出た訳なんですが，……」(44)

姉のチマは言う。「家に来てから，タキちゃんが一度家出したんです。気持ちの負担といいますか，皆に親切にされるんで，とてもつらい，って。」(45)

タキは，多喜二の家を出る時の気持ちを語った時，「お借りしたお金は，何としてでも，働いて返そうと思って」と，弟に言った(46)。ここで言うお金とは，もちろん身請けされた時の金である。

---

(43)『小林多喜二全集』第7巻，84ページ。
(44) 宮野駿「田口タキ」(『北方文芸』171号)。
(45)『北方文芸』同。
(46) 宮野駿「田口タキ」(『北方文芸』171号)。

多喜二はすぐ，瀧の母親のところへいった。しかし来ていない。多喜二は，「高島の安藤さんのところへも行く。然し来ていない。妹のところへも来ていない。――母も妹も朝里の姉さんも義兄さんも，福原の奥さんも皆，力を落し，心配している。

俺は眼が痛く，真赤にはれ上っている。」(47)

福原さんは，近所の親切な医者である。朝里の姉は，チマであり，義兄は，佐藤さんである。

嶋田正策も言う。瀧が「居なくなった時，多喜二は必死になって探してね。それこそ涙を流しながら。（タキは）小野病院で働いたり，中央ホテルのウエートレスをやったりしていた……」(48) ただし，この文は混乱している。小野病院はこの時の家出のときであるが，中央ホテルはその後小樽からの出走の後にいたところである。

チマも言う。「妹たちもみんな，心配してね。［瀧は］ほんとにいい人だったから。」

多喜二は書く。「本当のところ，タキちゃんがいなくなって，始めて，俺はタキちゃんに対する気持ちをハッキリ分った気がする。

東京へ，若し出れることがあるとしても，俺にはタキちゃんなしでは生きて行けない気持ちがする。」

瀧は「俺だけが頼りなのだ。それを俺がまた，東京へ行きたがる（そういう欲望追求のために）タキちゃんを事実上追い出すことにしてしまった。……いま俺がタキちゃんを救う，その救えるたった一つの方法，その他のどれでも駄目な方法は結婚だ！」(49)

タキの弟・宮野は書く。「タキはいまでも，小林の家では，部屋はおろか狭い廊下にまで本が山積みになっているし，やってくる友人たちとの侃侃諤

(47)『小林多喜二全集』第7巻，84ページ。
(48)『北方文芸』同。
(49)『小林多喜二全集』第7巻，84－85ページ。

諤は難しくてさっぱり分からないし，近所の病院長の娘さんが遊びにくると，多喜二の弟の三吾さんがバイオリンを弾き，声楽というのか，みんなが五線譜を見ながら声を合わせて歌う。到底わたしは多喜二にもこの家にもふさわしくない人間だと悟った，と語っている。」(50)

さて弟・宮野あて手紙を，瀧子は書く。「私は小林にふさわしくない女だ。お別れしなければと思ったのです。そして決心して小林の家を出た訳なんですが，本当に心の底から小林を愛していたもので，決心はしたものの，はっきりお別れが出来ずに，東京まで行くことになるのです。」(51)

表面的に，多喜二を東京に出すために，瀧子が身を引いたことになっている。それは表面では正しい。しかし，それ以外にもあった。決定的なことは，彼女の過去を気にして，多喜二が本当に結婚に踏み切れないことにあった。多喜二の苦しみを，タキはよく知っていた。そのことは2人しか知っていない。またもし，多喜二が東京へ行っても，経済的な理由だけなら，何とかなるものである。多喜二も，瀧子が家出してからの日記で書いている（上述)。仮に東京で多喜二が瀧子を養えないとすれば，瀧子が働くことによって，多喜二の足手まといになることはないのである。だから観念の問題なのだった。

多喜二はそれでも，瀧子を必死に一週間捜し，1926年11月18日に，滝と会えた。つまり一週間後である。11月18日の夜，二人は会った。瀧子が小樽の花園町の小野病院（現在，皆川病院になる）に，住み込みで働いていることが分かったのだ。こうして二人で，街を歩きながら，話した。

それ以後，二人は，時々会って，映画をみたり散歩をするという間柄になる。

家にもどれ，という多喜二の意見にたいし，自活したい，と瀧子はいう。こうして，別居して，二人はつき合うのである。

---

(50) 宮野駿（『月刊おたる』1992年10月)，21ページ。
(51) 宮野駿「田口タキ」(『北方文芸』171号)。

一二月一日には，「二見館」で映画をみ，しかし，帰りに気まずい別れ方をした。多喜二は泣いて帰るほどだった。三日に，瀧子から手紙がきて，もう誘わないし，出ないと書いてきた。しかし12月16日か17日に，瀧子が電話で映画に誘い，「電気館」へ行き，帰りに途中で何度もキスをする，というような具合いであった。要するに，普通の恋人と変わらない。

こうして，小林多喜二の大正時代が終った。

本稿は，高商史研究会の活動の一結果である。